

クライアントの根源的な問いに対するセラピストの経験

— 面接場面における「宗教的」な経験に視点をあてて —

有 島 麻由子

I 問題と目的

近代科学の発展に伴い、人々は便利で快適な生活を手にしてきた。一方で、その発展が、「解決すべき課題、いわば『影』ともいえる側面」をもたらしたということは、文部科学省（2007）も指摘している通りである。例えば、臨床心理学の分野においては、自分という存在についての確かさが失われたことがその1つであったと考えられる。

その不確かさ故に、クライアントは心理面接の場に、根源的な問いをもって来談することがあるという。根源的な問いとは、自らの存在意義を問うようなものである。河合（2000）は、この根源的な問いに対する体験を「宗教的」という言葉で表しており、「人間の最も根源的な問いに対して、頭で答えるものではなく、体験を与えるものとして生じてくるもの」であると述べている。面接場面で根源的な問いをもつクライアントと共に考えていく立場に立つセラピストは、この「宗教的」な体験に開かれている必要があると考える。

根源的な問いは、古く哲学の分野で扱われてきたものであるが、近年、臨床心理学の問題としても扱われるようになってきた。C.R.ロジャーズやV.E.フランクルは、クライアントが根源的な問いに関わる深い悩みをもつとき、そして、心理面接の中でセラピストと共にその答えを求めてその問いに真摯に向き合うとき、その答えは言葉を越えた“運命的”、“衝撃的な体験”、あるいは“突然の”“夜が明けたような”できごととして生じると、それぞれの言葉で語っている。

面接場面における根源的な問いを扱った先行研究をみてみると、「スピリチュアリティ」という言葉で論じられるものが多い。そこでは、根源的な問いを問うことの重要性や、1つの事例の中でのセラピストの経験等を論じているものがみられる。ロジャーズはスピリチュアルなカウンセリング面接における自身のセラピストとしての経験を

語っており、それは、「『直観』レヴェルの応答」であったと言う（諸富，1997）。

面接場面において根源的な問いが持ち込まれる時、セラピストは何らかの形で「宗教的」（河合，2000）な体験をしているのではないかと考える。また、そのような問いに聴き入るセラピストの在り方によって、クライアントがその問いに向き合う姿勢も影響を受けるだろう。

そこで本研究では、面接場面においてクライアントの根源的な問いをセラピストがどのように経験しているのかを探ることを目的とする。

II 方法

調査協力者：臨床心理士の資格を持つ臨床歴10年以上の3名（A, B, C）。

分析方法：解釈的現象学的分析（interpretative phenomenological analysis：IPA）を用いて分析を行う。具体的な分析手順は4段階に分けられる（ラングドリッジ，2016田中他訳）。

第一段階：トランスクリプトの特定箇所の意味についてコメントを記入する。

第二段階：最初の書き込みを反映し、現れてきたテーマを記入する。

第三段階：より分析的にまたは理論的にそれらを整理する。

第四段階：秩序のあるテーマ表を作成する。

III 結果と考察

ここでは、紙面の都合上、Aの分析の一部のみを例として示す。その後、第四段階で作成したA, B, Cのテーマ表を統合して導き出したマスターテーマ表を掲載する。

◆ 第一段階、第二段階

第一段階	第二段階
関係性が出来てくると、根源的な問いはさまざまな言葉で語られる。	根源的な問いが語られる条件

◆ 第三段階 [Aの最初のテーマ表 (一部)]

1. 根源的な問いが語られる条件
 - ・セラピストとクライアントの関係性が築かれている
 - ・セラピストは試されている感覚をもつ

◆ 第四段階 [Aの最終テーマ表 (一部)]

1. クライアントとの関係性
 - ・セラピストとクライアントの関係性を築く
 - ・セラピストは試されている感覚をもつ

[マスターテーマ表]

1. 根源的な問いが語られる関係性の経験
 - 【ラポールの構築の経験】
 - 【セラピストの積極的な関係性への思い】
2. 根源的な問いの受容の経験
 - 【緊張やしんどさの経験】
 - 【畏怖の念の経験】
 - 【喜びの経験】
3. 根源的な問いによる見立ての修正
 - 【根源的な問いによる新たな気づき】
 - 【根源的な問いによる見立てなおし】
4. 根源的な問いがもたらす存在への気づき
 - 【クライアントの強さや尊厳】
 - 【セラピストの個人とセラピストとしての葛藤】
 - 【セラピストの存在意義】

1) 根源的な問いが語られる関係性の経験

クライアントとの関係性の大切さを経験しており、その中で根源的な問いが語られ、また、根源的な問いを共有することによって、関係性がさらに強まり、あるいはより深まるという経験をしていることが分かった。佐治 (1966) は、カウンセリング場面における「転機は、個人の内部に生ずるものなのだが」、それは「治療者との安全で理解ある交流にもとづいて」生じるのだと言及している。面接場面では、クライアントとセラピストとの「安全で理解ある交流」が、根源的な問いの語りという1つの転機となり得るのだろう。

2) 根源的な問いの受容の経験

面接場面でクライアントが抱く根源的な問いを受けるセラピストは、それぞれの異なる面接場面と、感受性の独自性を持ちながらも、同様に、さまざまな感情的経験が生じていたことが分かる。

3) 根源的な問いによる見立ての修正

根源的な問いがもたらされることによって、面

接場面にさまざまな気づきもたらされ、それがさまざまな見立て直しの機会となることが伺われた。土居 (1996) は、「見立て」という言葉は、「単に症状の評価ばかりでなく、患者のポジティブな価値を含めての状況判断をあらわすこと」ができると述べている。ここで語られた経験も、まさにポジティブな価値が含まれた見立ての経験であると考えられよう。

4) 根源的な問いがもたらす存在への気づき

佐治 (1966) は、セラピストは、「カウンセリングにおいて経験している自己の感情に対して、全く自由にそれを認め、受け入れることが第一の条件」であると述べ、セラピストがこの条件を満たす時、「クライアントは信頼感をもち、ともにいることに安定を感じ、自己の問題の探究を進めることができる」という。ここで語られた経験、例えば、クライアントが「生き抜いてきた」ことへの畏敬の念を伝える経験や、クライアントの力を「支持」する経験、自分の迷いを「オープンに」する経験は、セラピスト自身の誠実さの経験でもあったと考えられる。

5) 総括と臨床心理学的意義

本研究は、面接場面における「宗教的」な経験に視点をあてて行ったが、今回の研究協力者の語りの中では、間接的に「宗教的」な経験に開かれていたのではないかということが伺われた。心理面接の場で出会う根源的な問いに対するセラピストの個人的な経験の在り様を明らかにしたことで、一つの範例を示すことができたと思う。多くのセラピストが心理面接の場で、根源的な問いに出会う時、セラピストとしての自分を振り返るための一つの視点を提供するものと考えている。

【引用文献】

- ダレン＝ラングドリッジ (2016). 田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子 (訳). 現象学的心理学への招待 理論から具体的技法まで. 新曜社, pp.149-180.
- 土居健郎 (1996). 「見立て」の問題性. 精神療法, 22, 2, 118-127.
- 河合隼雄 (2000). 河合隼雄のカウンセリング講座. 創元社
- 文部科学省 (2007). 平成19年版 科学技術白書 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpaa200701/004.htm (最終確認日: 2019.1.31)
- 諸富祥彦 (1997). カール・ロジャーズ入門—自分が「自分」になるということ—コスモス・ライブラリー, pp.139-172.
- 佐治守夫 (1966). カウンセリング入門. 国土社.